

ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正使用 措置	感染症(PT)	出典	概要
												鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1720-1724	3種類の野生の陸鳥のインフルエンザA(H5N1)に対する感受性と伝播性について調べた。スズメは最も感受性が高く、66-100%が4-7日以内に死亡した。ムクドリは高しべルのウイルスが検出されたが、死亡例はなかった。ハトが最も感受性が低かった。接触した鳥への伝播はほとんど起こらなかった。最近のインフルエンザウイルスH5N1ウイルスは一部の陸鳥に対し、病原性はあるが、同種間での伝播率は非常に低い。
												鳥インフルエンザ	鶏の研究 2007; 82(10): 35-37	高病原性鳥インフルエンザの発生した京都府丹波町で冬季に活動するハエ類の分布調査を行い、採取したオオクロバエとケブカクロバエからH5N1亜型インフルエンザウイルス遺伝子が検出され、一部から感染力のあるウイルスが分離された。同クロバエは冬に繁殖し、移動能力も高く、鳥インフルエンザに感染したニワトリの糞と一緒にウイルスを取り込んで伝播した可能性が示唆された。
												鳥インフルエンザ	鶏の研究 2007; 82(11): 40-43	農場周辺で採取したクロバエの消化管からRNAを抽出し、鳥インフルエンザウイルスの検出と分離を行ったところ、マトリックス蛋白質とヘマグルチニンの遺伝子断片を検出し、強毒タイプであることが確認された。またオオクロバエの消化管から分離されたウイルスはH5N1亜型で、鳥インフルエンザで死亡したニワトリから分離したウイルスと同一であった。ウイルスはオオクロバエの体内で24時間感染性が維持され、伝播する可能性が示唆された。
												鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2008; 14: 149-151	農場で生まれた令鶏とガチヨウを実験施設で育て、2種類の異なる遺伝子型のトリインフルエンザH5N1ウイルス(A/chicken/Miyazaki/K11/2007)を鼻腔内に接種し感染性を調べた。ガチヨウ1羽で角膜炎が現れた外は臨床症状は見られなかったが、皮膚からはウイルスが分離され、羽毛表皮細胞からはウイルス抗原が検出され、ビリオンが観察された。両ウイルスは家禽のフェロとガチヨウの羽毛表皮細胞で複製され、羽毛が感染源となる可能性が示唆された。
												鳥インフルエンザ	鶏の研究 2007; 82(12): 36-39	ニワトリは近くを飛び回るハエを捕まえて食べる習性がある。クロバエ類が鶏舎への高病原性鳥インフルエンザ伝播の一要因であるとして、一般的なイエバエ科の施設内での駆除方法をクロバエ対策に調整するのは不十分で、鶏舎内へのハエの侵入を阻止する対策が必要である。クロバエ類が通過できない大きさの格子でできた粗めのネットを鶏舎開放部に張るとい物理的手段も検討に値すると思われる。